

<川越市>

<川越市議会 6月議会>

トンデモ答弁連発でコロナ禍ならぬ「川合市長禍」？

今回も川越市議会6月議会の傍聴取材を続ける本紙は、昭和57年(1982年)4月の創刊から現在まで川越市に本拠を置き、数多くの行政問題を追及してきた。月刊紙としての創刊当時、川越市長は現市長の実父・川合喜一氏であった。市内を中心とする多くの心ある読者諸氏に支えられながら、気がつけば本紙は、来年には創刊40周年を迎えることになる。

先輩風を吹かせるわけでもないが、現在の川越市長が大学を出て、ヨチヨチ歩きの弁護士として社会勉強を始めた頃から、本紙は、歴代市長にさえ直言を辞さない厳しく時に苛烈を極める行政批判を展開してきた。

この理念は「主権者=市民」という国民の権利に立脚した、徹底的な「行政=権力」監視とその横暴への「ペンによる反撃」という市井のジャーナリズム精神において揺るぎないと自負するところである。

その上で断言するが、市政100年の川越市において、現市長・川合善明ほど、ここまで市民を欺き、単に私利私欲と権力欲の愉悅に浴するためだけに市長職にしがみ続ける醜悪な国賊はまたとないだろう。

現在、「私人」の裁判であると開き直った市長・川合善明氏が、川越市への住民訴訟を提訴した原告市民ら22名のうち4名だけを被告として狙い撃ちにしたスラップ訴訟が「係争中」の裁判となっている。

住民訴訟原告市民の中から、なぜこの4名だけが川合氏の「標的」にされたのか？ その理由は、川越市政にかかわる者ならば誰でも知る公然の秘密で、この4名の市民が川合善明氏の政敵・渋谷実元県議の支持者だからである。渋谷元県議はすでに政治家ではないにもかかわらず、川合市長は異常な執念で渋谷氏を敵視し、渋谷氏と親しいというだけの理由で私怨晴

らしに市民を的にかけているのである。まさに戦後日本の自治体史でも前例なき「異常市長」だ。無論、記者クラブの地元記者も、川合市長のこの異常極まる振る舞いを知っているはずだが一切報じていない。

マスコミは、川合市長を特に忖度(そんたく)するほどの存在感を認めていまいが、「私人としての川合氏が個人的にやっている裁判」という免罪符を援用して無視を決め込んでいるだけのことだろう。だが本紙は、「草民のジャーナリズム」たる原点を忘れることなく、地元マスコミが職務怠慢にも一切報じない行政腐敗と虐政の首長を徹底的に追及、糾弾していく。

今回の6月議会9日目の一般質問では、またしても川合市長の病的なまでに傲岸不遜な答弁が飛び出し、議場にいる議員らの表情には「いつまで、この市長の相手をしなければならぬのか」とでもいう、あからさまな辟易の色が浮かんでいた。



もはや川越市議会のメインイベント対戦カード！

小林 薫 市議

VS

川合 善明 市長

川越市政・市議会に詳しい市民は、小林薫市議と川合市長の根深い確執をよく知っている。

ただし、正確には両者の間にあるのは「根深い確執」ではなく、市民を代表して真つ当に市長を追及する小林市議に対する、川合市長の一方的で異常な怨念による敵意でしかない。

そのことは、川合市長が住民訴訟原告市民の内、元県議の渋谷氏と親しい4名だけを訴えたのと同じく、小林市議を訴えたことにも明らかである。

今回の6月議会でも、川合市長追及の「大将」は小林市議である。

川越市議会では小林市議対川合市長の質疑・答弁は、もはや総合格闘技のメインイベントと化していると言ってよいだろう（ただし、観客数は格闘技のスターファイター・朝倉未来選手の100万分の1程度だが…）。では、6月9日の一般質問に立った小林薫市議の質疑と、それに対する市長答弁のダイジェストをレポートしよう。なお実際の議会では、小林市議の質疑全体に対して、川合市長の答弁もまとめて行っているが、紙面では読みやすさに留意して、一問一答形式で記載している。

小林市議は質疑に入る前に、まず川合市長にこう釘を刺した。

小林 薫 市議

市長はまだワクチンを接種されていないようです。市民の方から、市長はワクチンを接種した方がいいと言われていたんですよ。「ああそうですか」と私も言ったんですけど、「市長は川越市民を代表する重職にある方だから、ワクチンを接種した方がいいんですか」と尋ねましたら、この方は「市長は蔓延防止が解除されれば、またどこかで誰かと手を繋いで酒を飲むかわからない。こういう方は真っ先にワクチン接種をしてもらわないと市民は不審でしょうがない」という。

市長だけの問題じゃない。周りの問題なんだね。だから市長は接種した方がいいや。議場で私も尋ねていますが、市長は、いつ、誰と、どこで手を繋いでデュエットしたか、記憶が定かではない。そういう方は接種をしてください、怖いから。

何もしないで一日中、市長室にいて、決裁だけして、夜も自宅に帰って夕飯を食べるような方ならよろしいんですが、市長は大変積極的ですから感染が拡大するといけませんので、真っ先にお打ちになればいかがでしょうか。

議場の傍聴席にいた本紙記者によれば、マスク越しにも川合市長の顔面が怒りに硬直していく様が見える気がしたという。落語家市議たる小林市議の面目躍如、マクラ（落語本題の前の小咄）は堂に入ったものと言おうか。そして本題の質疑は「市長の政策について」である。

小林 薫 市議

選挙の法定チラシがありますが、目立つところに「豊かな経験 実行力!!揺るぎない市政運営でコロナに打ち勝つ！」ということが書かれておりますが、具体的にはどうということなのでしょう。他市に勝るとも劣らない市長が自慢できるコロナ対策とは…。

川合 市長

自慢できるコロナ対策は、何かということでございます。医療体制の強化と致しまして、患者の入院先を確保するために市内の医療機関を直接私が訪問し、入院病床の確保や入院医療機関からの転院受け入れの協力をお願いしてまいりました。

特に転院受け入れにつきましては、患者を受け入れた医療機関への協力金制度を創設しまして転院受け入れの促進を図りました。感染拡大の防止策と致しましては、高齢者施設等の感染拡大を未然に防ぐために、2月に施設従事者等へのPCR検査を行うとともに、4月～6月の間は定期的に検査を実施しているところでございます。

地域経済の支援と致しまして、市内で事業を営む中小企業者の各種相談に対応するため中小企業診断士による相談が無料で受けられる相談窓口を設置するとともに、市内中小企業者に対する事業継続支援金を給付しております。また市民生活を支える路線バスの運行を維持するため、路線バス事業者に対しまして支援金を給付しております。

市民生活への支援と致しましては、一人親世帯生活応援支援金の給付、高齢者世帯に対するエアコン購入費等の助成、女性の負担軽減として防災備蓄品の生理用品の配布など、新型コロナウイルス感染症にかかる対策に全力で取り組んでまいりました。

川合市長のこの答弁は、初めから見当違いである。なぜなら、ここで川合市長が答えている「**対策**」なるものの大半は、このコロナ禍時代にどの自治体も当然に実施している、強いて言えば担当課による業務だ。小林市議が、4期目市長選の時のチラシを挙げて聞いたのは、コロナ対策を謳って当選した川合市長への「**答え合わせ**」である。「**コロナ禍を乗り切るには次期市長もベテランの自分しかいない**」と豪語した、川合市長でなければ到底実現は出来なかったコロナ対策は何か？

と、小林市議は質疑したのだ。

これに対する川合市長の答弁は、対抗馬だった川目氏が新市長となっても当然実施された対策であろうし、「**女性の負担軽減とする生理用品の配布**」に至っては本紙既報のとおり、市民からの要望を担当課が受けた話であって、初めから川合市長の出る幕はなかった話である。そんなことまで、自分の手柄に粉飾して答弁に利用するとは、どこまで卑小な首長であろうか。

職員からの内部告発！

なんの意味もないワクチン接種予約「説明会」は市長の思いつき？…

小林市議の、続く質疑では、川合市政の無責任なコロナ禍対策に振り回される市職員からの、一種の内部告發文書が明らかにされた。

小林市議

「ワクチン接種予約のためのスマートフォンの操作方法に係る講座の実施について」というのがありますが、教育長の名前で報告を受けました。責任者は教育長でよろしいのでしょうか。市長はどのような責任を持っているのかお尋ねします。

私のところにこのような手紙が届きました。現場の職員さんですよ。「市長の思いつきで、ワクチン接種の予約方法の説明を公民館で実施するということになり、混乱が生

ています。」まず、「周知期間がない」、「場所がない」、これを受けても「予約は取れない」、予約と間違えて来る方がいるだろう。

「スマホ以外は、予約サイトにアクセスできない」、「適切に支援する人材・職員がない」、「それをするためには、しっかりと誰に何をどのように支援するのかを決めておかないと余計な混乱を招いただけだと思います。来場者用に予約枠を確保するとか、会場に来れば確実にサイトに接続できるなどの対策なしに、単にスマホを持っている人にだけ説明して一定時間接続を試みるということだけで、どれだけの効果があるのか甚だ疑問です。」市長はこの事業に対して、どのような責任をお持ちになるのか。

この事業の評価をされるんですか。されるのであれば、いつおやりになるのか。

川合市長

スマホを使ったワクチン申込みの指導についてでございます。誰が責任を持つのかということですが、最終的には、この事業につきましても市長が責任を持つことになろうかと思っております。それから、この事業の評価をするのかどうかという点でございますが、コロナが落ち着きまして余力が出ましたら、全てのコロナ対策について一応の評価はしてみたいと思っております。

この市長答弁も、まったく答えになっていないと言える。小林市議は、匿名市職員による内部告発証言を手に、このコロナ禍対策を「思いつき」で命じた川合市長の政治姿勢と責任を問うているのだ。だが川合市長は、具体的に「どのような責任を持つか」には答えない。「市長が責任を持つことになろうかと思います」などは当たり前のことで、小林市議は、現場の職員に混乱を来している川合市長の「思いつき」の説明責任を求めているのだ。しかし、例によって役職名だけの「市長」である川合善明氏には、何も答えられない。

気まぐれの「思いつき」を部下に投げることはしても、当の職員からも実施の効果が疑問視され、職務上の無意味な負荷増を指摘される対策とやらの必要性を具体的に説明することが出来ないのである。だが、市長としてのモラルや指導力、市政のビジョンも一切持ち合わせていない川合市長が、唯一具体的に返答できることがある。それは、自らが病的な執念を燃やして敵視する川合市長が「気に入らない」市民に対する態度の正当性の主張である。

「白い目」が注がれる川合市長によるトンデモ議会答弁

この日の小林市議の質疑は5つあったが、最後の質問で川合市長恒例の「トンデモ議会答弁」が飛び出した。小林市議に対して議場で「訴えますよ」（実際に訴えた）などの常軌を逸した発言を平然と

してきた川合市長だが、今回は本紙が川合市長を指す定番のフレーズ「おれ様市長」の居直り以外の何ものでもない醜悪かつ邪悪な本性を、隠すこともなく議会の場でさらけ出した。

小林市議

市長は Facebook にいろんなことを書き込まれている。3月23日には「三月議会が本日閉会しました。今回は、一般質問は29人とこれまでになく多くの議員がされて、執行部としても大変参考になるものが多くありました。感謝です。」と議員の質問に感謝を述べられている。29人の議員が質問されていますが、誰のどの質問が参考になったのかお尋ねします。

なぜ、このようなことを聞くのかというと、去年の3月6日の市長の Facebook で、この前々日に妊婦さんへのマスク配布を共産党の川口議員が提案されました。

市長は「検討します」という答弁をされました。ところが2日後には、市長の Facebook に「妊婦さんへのマスク配布を決めました」あたかも自分の政策のように書かれている。これは市長の政策ではないんですよ。市長には執行権がありますから「私がやりました」と言われればそうなんですけど、提案したのは議会ですから、「議会の提案を受けて決定しました」と言うべきなんですよ。

だから私がブログに「議会軽視だ。なめた真似をするじゃねえか」と書きました。

それを受けて市長は3月10日の Facebook に「私のフェイスブックをご覧になっている皆様、是非三遊亭そうり(小林薫市議会議員)の今日のブログを見て下さい。」と呼び捨てだよ。市長は私だけではない。どういう理由か知らないが、市民を呼び捨てにする癖ですか。意識してやってるんですか。

市長は良識ある市民を呼び捨てにするのか。また私に対して「なめた真似をするじゃねえか！などとヤクザのような言葉で非難しています。」とある。「なめた真似をするじゃねえか」は、ヤクザのような言葉なんですか。

市長は平成31年4月26日の部課長会議の市長訓示で「これは言ってもいいと思うが、過去には人事に関する議案の順序を勝手に入れ替えられたこともあり、議会に対して、こちらもナメられたもんだと怒りをおぼえた。」と訓示でこういうことを言っているんだよ。だから私もこれを流用して同じ言葉を使っただけです。

市長は議員の提案を、我が物顔で自身の政策として発表しますけども、市長として恥ずかしくはないのか。

この小林市議の猛追撃に、川合市長はまるで神経が切れたような「トシテモ答弁」を、なぜだか勝ち誇ったかのような表情でこう口にしたのである。

川合市長

Facebookに妊婦さんへのマスクの配布についてでございますが、私は議会の答弁のときは、「検討したい」と。その場で決めるわけにはいきませんので、今後検討したいと答弁した記憶がございます。検討しまして実行しようと思ったから行っただけのことでございます、それは議員さんの提案で決めたのか、そのようなことを一つ一つ申し上げるものではないと、私は考えております。

それから、これに関連して小林議員さんのことをブログの中で呼び捨てにした、ある市民のことを呼び捨てにしている点でございますが、理由は残念ながら私が呼び捨てにする方は、私が青い目を向けるべき人とは思えないからでございます。

青い目は、わかりますか？ 青い目は、白い目の反対です。

それから私も「なめられた」というようなことを言っているということですけども、私がFacebookに記載した内容は、「ヤクザのような言葉」という一般の方が使うことが稀な乱暴な言葉使いを表現したものでございまして、人物を表現したものではありません。

川合市長が、人様を呼び捨てにする理由として得意満面に引用した「青い目」とは、阮籍青眼（げんせきせいがん）という中国の故事である。古代中国の晋朝（紀元265年～420年）の賢者・阮籍（げんせき）が、心から歓迎する来客は「青い目」をして喜んで迎え、気に入らない客には「白い目」で邪険にしたという故事で、一般的には「白い目で見られた」という慣用句のほうが知られている。

川合市長にしては珍しく格式高いたとえをしたつもりなのだろうが、かえって市長の浅学と支離滅裂の牽強付会を露呈した。要するに、川合市長は「おれが気に入らないやつは呼び捨てで構わない」と言明したに過ぎない。本紙社主も川合市長から「市長ブログ」（すなわち公的な立場での発言）で呼び捨て表記されたことは1度ではないが、小林市議は、そもそも自分が気に入らないというだけで市民を平然と呼び捨てにする市長の了見自体の是非を問い質したのだ。

ところが、川合市長は「私が呼び捨てにする方は、私が青い目を向けるべき人とは思えないから」と釈明する。ここまできると、ただのバカでしかあるまい。「青眼」の故事で耳障りを誤魔化しただけのことで、単に「気に入らない相手は呼び捨てで当然」だと議会答弁しているのだ。念のために読者に註釈するが、この議会答弁を滔々と語る川合善明という人間は川越市の市長である。

政界スキャンダルになるような政敵同士の論戦でも、人名には敬称を用いることなど政治家としては常識以前のマナーであり、一般の社会人であれば誰でも身につけているモラルだ。

川合市長には、マナーもモラルもない。いまどきは、小学校から男女平等、人権尊重の観点から同級生同士でも「さん」付けを教える教育現場が普通になっているが、川越市では市長自身が「**気に入らない相手は呼び捨てで構わない**」と議会で公言するほどなのだから、教育委員会の教育方針も独自のなのかもしれない。トンチンカンに誤用された中国故事は、市民と市議、市職員からも白い目でしか見られていないという、川合市長の無意識の自覚が口をついたものであろうか？

恥を知らないことに胸を張る「おれ様市長」の真骨頂！

小林市議の前掲質疑への市長答弁は、さらに次のように続いた。

川合市長

議員さんの提案をあたかも自分の提案のように言うのは恥ずかしくはないのかということですが、議員さんの提案であっても、純粹に自分の考えたものであっても、他市や他の団体がやっているものを参考にやっても、それは基本的には私が決めたことでございますので、あえて誰々のを参考にしました、誰々のご意見でございましたと言うことは、必ずしも私としては必要ないと。

従いまして恥ずかしいこととは思っておりません。

これぞ「無能」「無知」「無責任」の三拍子が揃いながら天下を取った顔で市長室に居座り続ける「**おれ様市長**」の真骨頂たる答弁だろう。自分の発言のすべてが矛盾することなど考えもせず、目の前に「**気に入らないやつ**」がいれば、とにかく反対の能書きを口走り、それが反撃になったと思うのだろう。一般企業の人事部あたりが川合市長のこのような言動をみれば、心療内科のカウンセリングを提案されても驚かないほどの異常さと言って過言ではない。

川合市長は、自分の考えであっても議員の提案であっても他市の施策の模倣であっても、すべては市長たる自分の最終決裁権で決まることだから、特段に他者への感謝や配慮を持つ必要はないと公言しているのだ。その一方で、市長責任を追及する市民はスラップ訴訟で恫喝し、自分を追及する市議は個人名をあげつらい偏執的なまでの私怨晴らしに腐心する。自分の手柄に出来ることは、すべて「**おれ様**」が決めたことで、批判されることはすべて他人のせいだというのだから、まるでサイコパスが市長席に座っているかのような戦慄を感じる。

この日の小林市議の一般質問では、本紙でも特集した「給食費無償化」についても質疑されたが、予想するまでもなく川合市長は「出来ません」を繰り返すだけだった。それどころか、川合市長は「給食費無償化」が、前期市長選での自分の選挙公約だったことを放置したうえで、次のように答弁したのである。

川合市長

給食費の問題につきまして、給食費の無料化を実現するためには、市単独の財源では到底、実現しません。国や県の財政支援が必要な事業でございます。

これまでいろんな機会を捉えて、様々な財政支援についての支援要請はしてまいりましたが、**給食費の無償化につきまして具体的に国、あるいは県の方に給食費の分について、しっかりと財政支援をしてほしいという具体的な要望活動は、私は行っておりません。**

自分で選挙公約に掲げた「給食費無償化」について、川越市長を名乗る川合善明というこの者は「**しっかりと財政支援をしてほしいという具体的な要望活動は、私は行っておりません**」と、こちらの耳どころか正気を疑うような異常な答弁を、平然とのたまうではないか。この点は、何度繰り返して追及しても足りないほど重要なことだ。すなわち、3期目市長選での川合市長は、公約を実行する気もなかったことを、この日の議会答弁で自ら居直って認めたからだ。

川合善明氏の、恐るべき最大の人格的問題点は「市長という権力さえ手にすれば、どれだけウソをつこうが職責を放擲（ほうてき）しようが、**誰にもそれを止めることが出来ない**」という「故意犯」でありながら、自分自身ではそれを「確信犯」と信じていることだろう。

わかりやすく説明しよう。

「確信犯」とは「**自分の言動は正しいもので、法律や社会のほうこそ間違っていると信じて行われる犯罪**」というのが正しい意味である。現代国語では、確信犯を「**悪いことだと理解していながら敢えて行う犯罪**」との意味に誤用されることが多いが、自分が悪いと理解して行う犯罪は「故意犯」という。つまり、川合善明氏は市長としての自分の言動のすべてにおいて、自分には微塵も非がないと信じている（確信犯）。だが同時に、住民訴訟原告のうち4名だけを狙い撃ちで訴えるときには、この訴訟を議案として議会に上げることは不可能だと事前に理解していたからこそ、川合個人の裁判として訴えた（故意犯）。

このように川合市長は、市長職という権力を維持するためには二律背反を使い分ける。選挙では、実現可能性や計画を考えることもなく「**義務教育9年間の給食費完全無償化**」を謳い、当選した途

端に「市長でさえいれば、どうにでもなる」と開き直る。さらに悪質なことに、一応弁護士でもある川合市長は、選挙公約を守らないことは法律上、なんらの犯罪にならないことを知っている。

社会常識としては、選挙での公約を守らない政治家には「詐欺師」と野次が飛ぶが、川合市長は「選挙公約が実現出来なかったからといって、犯罪ではないのだから何も問題ではない」と、自分自身は本気で「確信」しているのだ。

一方で、川合市長は、小林市議が給食費無償化の実現に向けた具体的な提案を示したにもかかわらず、小林市議の提案や意見に合意することは「敵への屈服」だと「確信」しているため「故意」に公約を無視し続けているのである。もはや議案の内容など関係がない、すべてが「おれ様の気分次第」であり、それを通用させることが出来る唯一の手段が市長職という権力というわけだ。

確信犯であると同時に故意犯とでもいう、病的な人格の市長ほど市民社会にとって危険な存在はない。市長職を維持し続けるためには、「給食費無償化」と子供たちにまで平然とウソをつき、市政を訴える市民や自分を批判する議員を訴え、自分が気に入らない相手は公然と名指しで呼び捨てにし、休日に公用車で議員の自宅に乗り込んでインネンをつけ、住民訴訟原告となった市民の自宅に原告側の弁護士を無視して直接電話し心理的に恫喝するなど、川合善明という人物はおおよそ「市長」のやるべきことの正反対のことばかりをやり散らかしたまま、それでも市長席に座り続けている。このような者を危険な存在と言わずして何というのか。

川合市長の世界観あるいは精神世界にあっては、自らの公約であった「給食費無償化」を放り投げ、子供たちに平然とウソをついたままで恥とも思わない自分の議会答弁が、なにも異常ではないのだろう。しかし、異常でなければ「責任能力」があるということになる。

仮に川合市長が「狂っている」のだとしたら、市民を訴訟で潰そうとしたり、市民を名指しで呼び捨てにしたり、議員の提案を自分の成果に粉飾したりといった画策など出来ないはずだ。つまり、川合市長は正常だが、権力を騙っては高額な報酬と支配欲の満悦に味を占め続ける、極めて邪悪にして卑劣な市民の敵ということになる。

病理犯罪者のように、相手が「病氣」ならば追及も糾弾も無効だが、川合善明市長は自分を正常と考えているようだから、その政治生命が絶たれる日まで、本紙は激烈なる川合市政批判を止めることはない。